

労働運動に会おける 「守る会」運動

沖電気の「支援する会」の発足、活動は、これまでの「守る会」活動の経験、伝統が大きな底流、教訓となっています。

「守る会」運動の原形は松川事件にあり、一九五九年におきた「主婦と生活社」争議での「守る会」は、労働運動での最初でした。

戦後、高揚してきた労働運動は、四五年のレッドパージにより全産業から一万二千人の組合活動家が職場を開放され、大きな打撃を受けました。また、レッド・パージに対し大衆的な解雇撤回闘争が組織ませんでした。

そのため、労働運動は暗い谷間の時代を迎えました。しかし、組合の再生をめざす階級的な労働者や青年労働者などによる不屈な活動により組合活動は息をふきかえしてきました。五四年、近江絹糸の女子労働者は、社長の前時代的なワンマン経営に反対し、仏教の強制絶対反対、結婚の自由などの要求を掲げ長期の争議を闘いました。世論は「人権闘争」として支援し、全国に大きな反響をもたらしました。そして、無権利におかれ、封建的経営色の濃い「証券取引所」はじめ、銀行や中小企業に波及し、争議は多発しました。

翌年には、春闘が発足し、労働運動が前進をはじめ、

また砂川の農民は「心に抗はうたれない。」と砂川米軍基地拡張反対闘争を警官の弾圧にめげず闘い、戦争反対、平和を求める労働者、国民の共感を博しました。さらに、母親大会、原水爆禁止大会がそれぞれ第一回の大会を成功させるなど、労働運動、平和運動、民主主義の運動は高揚してきたのでした。ここで、「守る会」運動での特徴的な運動をふりかえってみます。

先駆的な 松川事件の「守る会」

松川事件は、日本の労働運動史に欠くことのできない事件です。事件の性格が労働運動を断崖し、分裂させるための謀略であり、被告の無罪判決に大きな役割をはたした「松川を守る会」の運動形態が労働運動に影響をあたえたからです。

四九年（昭和二十四年）八月十七日、福島県松川駅の近くで列車が転覆し、乗務員三人が即死しました。事件発生の翌日、犯人について、何んら手がかりがわからずにないうちに、政府は「三鷹事件」と思想的底流において同じものである」と言明し、国労、東芝の労働者二十人を逮捕、起訴し、一審（昭和二十五年）で死刑五人を含む全員有罪、二審（昭和二十八年）では三人が無罪になりましたが、死刑四人を含み十七人が有罪の判決をつけました。

した。

松川事件が発生する一月前の七月、下山国鉄総裁が綾瀬駅付近で、バラバラの裸死体で発見され、また、三鷹駅では、無人電車が暴走し六人の死者を出すなど謀略的な事件がおきました。当時、公務員、民間の労使は人員整理、「合理化」をめくって、はげしい闘争を展開していました。政府、資本家は、下山、三鷹、松川など一連の事件が労働組合の活動家と共産党による仕わざだと、マスコミを通じ宣伝し、組合を弾圧、分裂させ企業整備が成功しました。引き継ぎ、占領軍の指導で全産業でレッドパージを強行し、活動家、共産党員を追放し、労働運動の指導権は労使協定の民同指導部が握りました。そして、昭和二十五年に朝鮮戦争が勃発しました。

事件直後、被告や家族が「無罪」を多くの人達や組合に訴えても、支援してくる者はなく、孤立無援の状態が続きました。しかし、被告は獄中から根気よく「無罪釈放百万人署名」を訴え、家族も職を奪われ、家などを売る苦しい生活の中で全国に無罪を訴え歩きました。困難な時期に活動を支えたのは「松川を守る会」の仲間でした。「守る会」が最初につくられたのは、清瀬市での結核療養所の結核患者でした。当時の結核は不治の病とされ、「死」を宣告されたのも同様で、毎日「死」とむき合って生きていました。「死」をはさんで死刑因と共通するものがあり、患者は文通をかわし無罪を確信し、学習会、交流会などを通じ、救援の活動をはじめました。また、広津和朗、志賀直哉、川端康成、井伏鱒二氏などの救援や「守る会」が全国の地域・職場につくられました。

労働運動で初、

「主婦と生活社」守る会

五九年（昭和三十四年）二月、組合結成一年目を迎えた「主婦と生活社労働組合」に対し、会社は組合つぶしを



こじまひろし／一九二七年、群馬県藤岡市で生まれる。早大土木工学科卒。一九四九年、横浜交通局に入るが、五月でレッドパージにより首切り。一九五〇年、都電の軌道工事課に入る。一九六七〜一九七〇年、千代田区労協副議長、争議対部長。一九七四年〜一九八六年（定年）まで東京都労働組合連合会（都労連）の常任執行委員として、地方財政対策部長、法対部長を担当。「守る会」運動では、報知、三菱樹脂、高野、細川活版など、数多くの労働争議を下から支える。沖電気争議では、解雇されるとすぐに「支援する会」の組織化に尽力し、事務局長を担当。家族は夫人と、娘ばかり四人の六人家族で、東京・調布に在住。

狙い、副委員長(女性)の配転を提示し、これを拒否した組合に対し会社は組合幹部の解雇を通告し、さらに暴力団を採用し、暴力で弾圧し、加えて、警察は会社に協力し、暴力行為を黙認し、組合活動に介入してきました。そのため、三二八日間の血みどろの争議となりました。争議発生時に、組合財政はわずか一万八千円(当時の国家公務員の平均月収二万円)組合員は、社員半数にもたりない数十名という状態でした。争議発生後、主婦と生活社労組の支援要請を受けた、千代田区労協は役員を配置し、組合員に支援参加や五十円カンパを訴えるなど、支援に全力投球しました。また、この争議を勝利させるため、職場、地域の労働者によって「主婦と生活労組を守る会」が結成されました。「松川を守る会」の活動をつづけていた職場地域の労働者を中心によってつづられました。

とくに、千代田区内には「松川を守る会」の労働者会員が多く、救援活動の中心でした。この会員が争議にかけつけ、勝利するため「松川を守る会」の経験をもとに、地域、産別の労働者を中心に「守る会」を結成しました。「守る会」は企業や労働組合の枠をこえ結集した会員が自発的に参加し、署名活動、カンパ、集会などの行動に献身的に参加する「草の根」運動でした。会員は、長期の闘いを下から支え、争議団や支援団体の人達の魂をゆり動かしました。

また、この活動が、金印総連、出版労連の産業共闘を生み出す契機となり、地域と産別の共闘により運動も前進し、総評、地評も支援しました。さらに、六十年安保闘争、三池争議とも結合し、全国的な規模の闘いに発展しました。主婦と生活社争議の記録『緋はしこと鉄かぶと』には「守る会はこの運動を通じて、職場、地域の活動家を中心に幅広い統一戦線を組織した。日本の労働運動の全く新しい戦術の芽はえであつた」と記録されています。

この経験は、三井三池争議支援の「三池を守る会」や



中小企業、未組織労働者などの人たちの争議に引き継がれ、レッドパージ以降の労働運動に闘う展望の道を示してくれました。

レッドパージ後、困難な闘いを余儀なくされていた解雇者は、「守る会」での経験を吸収し、「守る会」「共闘会議」を結成し、広範な戦線を構築し、闘う仲間を支えられる体制をつくり出し、敵を大きく社会的に包囲させる高度な戦術をのみ出し、勝利の展望を切り開く確信をもちました。

日電の一人争議 にも「守る会」

争議の中で生まれた「守る会」はこれまで困難な状態におかれていた「ひとり争議」に、とくに大きな影響をあたえました。

六〇年代、日本電気では、暗い職場を変えるため、若い労働者を中心にしたこえや学習会などのサークル活動が活発に行われていました。栗橋伸次郎氏(現・日本共産党港区議)はサークルの中心的活動家でした。彼は、

低賃金と劣悪な労働条件を改善するため、組合の活動に参加していました。六二年二月、突然、会社は広島に転勤を命じました。栗橋氏は当時、六人家族で妹さんは重病で自宅療養を続けており、母親はその看病疲れのため寝込み、兄は難病といわれるパーキンソン病。栗橋氏は三人の病人と家族の面倒をみながら勤務していました。あきらかにサークルつぶしと栗橋氏追い出しの配転でした。

転勤を撤回するよう会社に申し入れ、また、組合にも協力を願ったが、拒否され、一方的に解雇を通告されました。組合にも支援されず、困難な環境の中での闘いに、日電、電機産業や地域の労働者は「日電栗橋を守る会」を結成し、財政援助、ヒラマキ、多くの労働組合に支援要請するなど手弁当で活動し、運動が大きく発展してきました。

七〇年三月、九年間の闘いののち、勝利の和解で決着しました。栗橋氏によると、日電もレッドパージと企業整備で四千人の労働者が職場から不当にも追い出されま

した。日電でレッドパージをうけたひとりの人が、栗橋氏の「支援する会」の結成に協力しました。その人は当時、「会社の不当な解雇に大衆的な運動が組織せず、会社の思いのままに終ってしまった。このくやしさをくりかえさないため、自覚的な労働者を中心に長期になる争議に勝利するため「守る会」をつくる必要がある」と精力的な活動をしてくれたと語りました。

巨象を蟻が倒した

三菱・高野争議

六三年、三菱樹脂に入社した高野君は試用期間が終ると同時に会社から「学生運動をかくしていた」ことを理由に本採用を拒否された。翌年千代田区労協の協力を得て区内の労働者や三菱の仲間を中心に「三菱樹脂高野君

を守る会」を結成し「三菱独占は民主主義の根幹である思想、信条の自由をふみにじった」と、広く世論に訴えました。裁判は地裁と高裁で勝利したが、七三年最高裁では敗訴しました。また、高野君の支援を決めていた三菱樹脂労組も七〇年に支援の打ち切りを決め、困難な状況におかれたが不当な最高裁判決に怒り憤った労働者、学生、市民は続々「守る会」に加入し、二千三百人に達し総評、地評の支援をうけるなど支援も一回りも二回りも大きくなり、三菱独占の牙城、丸の内、今までやれなかったデモを成功させるなど運動も全国に拡がり、七六年に十二年ぶりで「職場復帰」を勝ち取りました。「日本一の巨象(三菱独占)を無数の蟻(国民)の力でうち倒した」と評価されました。この力はさまざまな労働組合、労働者、市民、文化人、学者、弁護士など広範な人達のかきりない支持と、それを縁の下で支えた「守る会」の力でした。堀(はなわ)弁護士は「高野争議の勝利は、わが国の労働運動の歴史に残る性格を有する」とのべています。

共闘会議と二本足

「報知」争議

六九年一月、報知新聞社に、サンケイ新聞社の労働組合を弾圧し、サンケイ新聞を報道の自由を無視し、「自民党機関紙」に変質させた張本人の一人、岡本武雄(通称・アイヒマン)が就任してきました。併せて、読売新聞からも組合対策のため、役員がおくりこまれてきました。彼らは弾圧分裂の攻撃を報知の三単組に加え、第二組合を結成させた。まず、スト権放棄の「平和協定」を押しつけ、拒否するや、年末一時金の不払い、人員整理、暴力ガードマンの導入、先制ロックアウトなどゴッファッシュ支配を一方的にやり出してきました。当時、報知の労働者は、劣悪な労働条件におかれ、見えない鎖につながれて、「今夜も泣き泣き残業、人権尊

重なるのその」の落書が社内書かれるほどでした。報知労組は、職場の闘いを基礎に労働者を結集し、併せて千代田区の争議支援など地域の闘いの先頭に立ちました。また、新聞労連の中核として奮闘していました。

戦闘的な報知労組をつぶすため、岡本が送りこまれてきた。この重大さを感じた組合は、六九年に新聞労連と千代田区労協が中心になって「報知支援共闘会議」を組織し、争議が進行するなかで、さらに総評、総評弁護団、地評、マスコミ共闘が参加し「報知争議共闘会議」を構成させました。また、七〇年十二月「報知の仲間を守る会」が結成されました。これまでの労働運動における「守る会」は、ひとり争議や組合の活動、財政が弱く、また第二組合が争議に関係している場合など、自力で闘うことが困難な争議だけに、つくられていました。報知労組は、総評、新聞労連、地区労に加入し、第一組合として多数派を形成し、どちらかと言えば、自力で闘いのできる組合でした。なぜ、「守る会」を結成したのか——「守る会」の代表幹事の沼田裕次郎氏（元都立大学総長）は、「報知争議では憲法も何も無視した弾圧が起きている。労働基本権や言論の自由が奪われるのどこが争点だ。被解雇者を職場に返し、報知をマスコミ反動を阻止するトリデにしなければならぬ。どの組織も応援しないから作られてきた、これまでの守る会を一步発展させるためにつくると」助言してくれました。「守る会」の目的は「憲法と民主主義を守るため」と、位置づけ、労働者、学者、文化人、芸能人、学生、市民、経営者など報知らしい幅広い八千人の会員を結集し、東京、大阪を中心に全国に、二七支部の大部隊をつくりあげました。会員は、行商、裁判傍聴、集会、ヒラまきなどに積極的に参加し、会費も四年間で一千二百万円を集め、争議支援に大きな力を発揮しました。「会」の名称も「守る会」から「勝たせる会」へと改め、勝利の確信を一層強め、七四年十二月、六年間の争議は「全面勝利解決」で終結し、岡本社長は退社しました。

日本における

「守る会」の意義について

労働運動における「守る会」活動は、小学館の臨時社員採用闘争、細川活版解雇反対闘争などの解決に大きな力を発揮し、現在、その経験は争議団に引き継がれています。

労働運動に「守る会」「支援する会」が参加するのは、おそらく日本ぐらいで、外国にはないと思います。ヨーロッパ、アメリカなどの労働組合は、全国的規模の産業別労働組合に組織され、産業別の労使の協定は同種の産業の労働者に適用します。組合運動も産業別組合の統制におかれ、もし、支部や労働者が資本から攻撃を受けると、産業別の組合は組織をあげて闘い、闘いに責任をもちます。日本の労働組合は、会社ごとに組合が組織されている企業内労働組合です。

第二次大戦が終結し、労働者の多くは住宅、食糧不足に苦しみ、工場の倒産や企業整備による首切りが押しよせ、それに加えて、極度に悪化したインフレにより、まさに飢餓状態でした。労働者は生活といのちを守るため、職場で事業所で労働組合をつくりました。組合づくりも、戦争中の政府・軍部による弾圧のため活動家は少なく、強制的につくられた「産業報国会」を改組したり、会社の労働関係者によってつくられた組合も多くあり、ほとんどの組合は、会社の名を付けた「〇〇従業員組合」「〇〇労働組合」でした。その後、産業別に組合が連合し、全国組織を結成しました。全国一般、全印総連、全国金属などの産業別労働組合も実は企業内労働組合の連合体で、賃金、労働条件などの要求を産業別の大会で定めるが、妥結は、各企業ごとの労使交渉で済みます。外国では、企業内労働組合は御用組合とみなされています。フランス、イタリアなどでは、反ファシズムの闘いを経験した労働者、幹部は戦後、たまたちに、ファシスト



「守る会」運動で合宿。前列中央が小島氏(86年)

ためと戦闘的な労働者を職場や組合役員から追放し、また、労使協調の組合幹部を使い第二組合をつくらせたり、組合の弱点をついてきます。大企業の労働組合では労使協調路線を歩む役員が多数を占めてきました。

日本の労働者の賃金、労働条件などに大きな影響をもつてきた春闘も、八〇年代に入り指導力を握っていた総評から、労使協調路線を歩ゆんできた同盟の指導に移つり、右より労働戦線の統一が進行しています。春闘要求も大衆討議が形骸化し、労働者の生活実体をはなれ、日経連が主張する（生産性基準原理）と根拠を一つにする「経済との整合性を基本にした要求」になってきました。日経連は、経営を理解した賃金要求に満足し、加えて、企業の中の「産別自力解決」による「団交重視、自主決着」の春闘方針を歓迎し、労働戦線の右翼的再編成に絶大な期待をよせています。

春闘でのストライキは少なく、沖電気が指名解雇があつても、総評、電機労連は全く支援せず、また東電、石川島播磨、日産自動車などでは労使による差別と選別が公然と行われ、労働組合は、階級的な労働者を暴力で排除しています。

しかし、政府、独占資本が強力に進めている「産業の空洞化」「産業再調整」により、右よりの労働線である鉄鋼、造船重機、自動車などで首切り、出向、配転が労使協調が進められています。これまで「企業意識」を育成してきた「終身雇用制」「年功序列型賃金」が崩れてきています。そして組合に対する不信も広がっています。職場の要求に依拠し、企業の枠をこえた闘いを組織するためには、これまでの「守る会」や争議の経験を生かした闘いが重要になってきています。

「守る会」の

運営について

争議が発生し、独自解決や産別組織での解決が困難に

なると、他の産業の労働組合や地域の労働組合、民主団体や労働者に支援をもとめてきます。そこで「支援共闘会議」や「守る会」「支援する会」がつくられ、運動を大きく発展させています。労働者の階級性、連帯性です。

「守る会」は企業の枠をこえた組織で、運動もきわめて柔軟で原則的です。労働者の要求を大切に組織するから、企業からさらわれ、労使協調路線をとる労働組合幹部からは支持がありません。攻撃も露骨にかかってきます。「共闘会議」や「守る会」の命は支援してくる労働組合や民主団体、個人との団結を強めることであり、そのため民主的運営を行わなければなりません。とくに「守る会」「支援する会」の会員は、自らのふところから会費を出し、会議には自腹をきって参加し、会費をふやすためには、友人に一杯飲ますこともあります。会員になったため、会社からならまれ差別や不当な配転などをうけた人もいます。「守る会」は、不当に首を切られた労働者を救うため自覚をもち自発的に参加して、会員によって構成されています。そして、その実践は、きわめて高いヒューマニズムにあります。このことは、労働組合の原点とまったく同一、共通性をもっています。

日本の労働組合は、入社と同時に自動的に労働組合に入られ、組合費を徴収され、組合の指令は、機関決定と称し、自らの思想、信条まで侵害する特定政党支持まで押しつけられています。昔、フランス労働総同盟(CGT)の鉄道労働者の生活をテレビでみましたら、組合費を役員がひとり、ひとりに会って集め、その時、要求や組合の不満などを聞き、話し合っていました。労働組合から自覚、自発性を奪って、決まったことを上から命令することになったらまさにファシズムの組織になってしまいます。「守る会」は、また、労働者だけでなく、国民各層の参加を呼びかけています。市民、学生、学者、文化人などの参加者もたくさんいます。たとえば、三菱樹脂高野君の闘いは、労働基本権と憲法を守る民主主義擁護の闘いであり、報知の闘いは、労働基本権と報道の

自由を守る民主主義の闘いでもありました。沖電気の闘いは、指名解雇というファシズム的な労働基本権や民主主義を否定するファシズムに対する闘いでした。

「守る会」はきわめて、大衆的で民主的な組織です。手弁当で参加する会員が、楽しく、生きがいをもつ運営にしなければなりません。まず、会の運営は、参加者ひとりの意見要求を創造的な提案を引き出し、みんなで「よし」やろうと考えをまとめます。しかし実行するには、ひとりの条件や希望を出し、力あるものは力、金のあるものは金、知恵のあるものは、知恵とエネルギーを発揮してもらいます。

多くの「守る会」の経験によると、幹事会をきちんと開き、機関紙を定期的に発行し、会費はかならず集める。このことが「守る会」活動を成功させる基本となっています。

活動の具体的内容は①組織、②財政、③宣伝、法廷闘争などの四本柱になります。

沖電気争議での「支援する会」

一九七八年十一月、沖電気の会社は不当にも三〇〇人の労働者に対し、「指名解雇」を強行し、残念ながら指名解雇「反対闘争」を組むべき沖電気の労働組合はこのことを是認しました。会社の暴挙に全国から非難や怒りが湧きおこり、不当な「指名解雇」に反対し闘う沖電気の仲間を支援する労働者、市民、学者、文化人は一日一日とふえてきました。被解雇者のうち六一人はずさず、沖電気の不当解雇を撤回させる会（撤回させる会）を結成し、全国の労働者、市民、学者、文化人など国民各層に支援を訴えました。この支援にこたえ、十二月には有志から「沖電気を指名解雇された労働者と連帯して共にたたかう会」への加入がよびかけられました。そして、沖電気争議にふさわしい支援体制、組織づくりのため、

支援する人達や、争議経験者などが連日、時には泊り込みで討議し、七九年三月六日、二〇〇人の参加で足尾総会が行なわれ、会の名称を「指名解雇された沖電気の仲間を支援する会」（支援する会）としました。

（会則・役員、総会決議は「入会のよびかけ」参照）
第一回幹事会では、会員の加入をよびかけを全国に訴えました。全国の職場、地域、学園からたちだち、三五〇〇人が会員に応じ、引き続き拡大を続け、争議解決には一万四千三百六十五人に達し、守る会運動では、最高水準に達し、争議支援の行動、財政に大きな力を発揮しました。

一万四千余の「会」が勝利の一因

組織と云うのは、キチンとした指導ができなければ運動は進歩しない。東京では、千代田区(63支部、一千三百人)、中央区(59支部、三百五十一人)、豊島区(24支部、二百人)、三多摩地区(31支部、六百四十九人)、群馬(41支部、八百九人)、埼玉(66支部、六百六十九人)。などが、支部として運営されたが、幹事会を定期的に開催し、活動を総括し、こまめに行動を組んだところでは、争議団と「会」の人間的なつながりも強まり、支援の強化にもなりましたが、活発でない支部では、幹事会が、おもしろくなくて、だんだんと開かなくなったりしたところが多く、会費の納入や、行事への参加も悪くなりました。活性化のため支援デーを設けたところもありました。

会員が三人以上は、支部(班)として、ニュースの配布や連絡をしました。支部数は、六百二十九で、会員数は、全国で、一万四千三百六十五人になりました。支部の代表に、定期的に、薬書や手紙で、幹事会よりや訴えを届けるなどの工夫も、大切でした。ふやし方ですが、まず家族、そして友人。ここで、ふ

やせるかどうか一つの鍵でした。親しい人に訴えれば、反応もよいし、元気がでる。そして沖電気の職場や、電機の中へ。電機では、約五十支部(二千三百人)の組織になり、「電機総行動」の実戦部隊として、大活躍でした。地方では、沖電気の本社のある港区(東京)で七十四支部(二千三百九十九人)が組織されましたが、この数は地域別の最高となりました。県単位では、宮城、岡山で支部が発足し、特に、宮城県では、被解雇者の中屋重勝さんのお母さんの、ねばり強い運動により、四百二十人の会員が発展しました。

争議団の事務所へ、電話や手紙が来たら、必ず入会を勧めるなど、いつでも、どこでも、あらゆるつながりで訴えるを、基本にしました。支部に属さない個人会員は、全国で約三千人。特に東京や神奈川が多く、そのうち女性会員は、四四多でした。

争議団への、衣類、お菓子、文具、くだもの、のんびり、励まし手紙の多くは、女性の人たちからのものでした。毎年必ず、争議団の子どもたへプレゼントがあったり、正月には、重箱一杯のごちそうの差入れ。二人のカメラマンは、沖電気を撮りつづけてくれました。また「ルポタージュ研究会」の仲間は、ペンで沖電気を争議を共に闘いました。全国オルグでは、争議団に宿を提供したり、食事の世話までしてくれた会員。このように、全国のたくさんの方が、「会」に組織され、勝利まで心を結びながら支援を続けた。

▲財政▼ 財政は闘いのバロメータ。五万人の「支援する会」で沖電気争議を勝利させようが、「会」のスローガンでした。これは毎月一千万円の闘争資金があれば、財政面で勝利できるという点からです。沖電気争議では、行商、募金、アルバイト、支援する会の四つが財政の柱となりました。特に、行商が順調に伸びなかつた争議開始の一二年は、支援する会の会費が大きなウエイトを占めました。「会」が集めた、会費、カンパは、一億四千万円。毎

月一万円のカンパを続けてくれた青年。労働組合ぐるみで、総額八百万円をこえたあかつき印刷所の支部。会費を集めるために、会員の自覚のために、定期券入れの大きさの「会員証」を発行した支部などでの、会員の納入率は良かった。

また、全国の会員には、ニュースを送る時に、郵便局の払込通知票を同封しました。

▲宣伝▼ 組織の拡大、会費の集め、これをやる上で機関紙の果す役割は重要。機関紙中心の活動として連載マンガ入りの「はたらく」は、発足以来毎月一回平均二万五千部が作られ、会員に届けられました。「人間らしく働き生きる」ということを問い続けた「はたらく」は、「元気がでる新聞」「読みやすい」「日本全体の動きもわかり勉強になる」……など好評でした。また、豊島区(東京)の支部などは、独自の支部ニュースも発行しました。

▲法廷闘争など▼ 運動を法廷に持ち込む「傍聴者でいっばい」。裁判傍聴には、たくさんの方が参加し、争議団側の証人を励ますと同時に、沖電気の「首切りは自由だ」という主張に怒りを共有し、闘いをあげました。宮城県での支援する会は、重要局面では、必ず代表を派遣しました。海事検定の仲間は皆勤で参加。また争議支援の各種集会にも、会員は積極的に参加しました。

楽しくなければ、ダメだ。交流を深めるためには多彩なレクリエーションが重要。「会」の催しで一番大きかったのは、バス四台での「尾瀬ハイキング」。沖電気争議団の「こぶしバンド」が活躍した歌声喫茶。人形劇で争議を訴えたヒアパーティー。沖電気工場めぐり。映画会(はだしのゲン。あしたの火花。ドレイ工場など)。スキー。ソフトボールやボウリング大会。もちつき大会。登山。バーベキュー。平和の集い……一つひとつのつどいは、「会」と争議団の連帯と団結を強めました。



編
集
後
記

「はたらく」の縮刷版をつくってほしい、の声援により、この本が、できました。小さな「新聞」が沖電気争議の「組織」のために、大きな役割をもちましたが、十分ではありませんでした。この本が、踏み台にされ、機関紙づくりが、発展することを期待します。(松謙)